

産業医活動を する人のために

編集 社日本産業衛生学会 産業医部会

監 産 業 医 学 振 興 財 団

日本産業衛生学会産業医協会

編集責任	岡田 章	日本産業衛生学会理事・産業医協会会長 九州大学健康増進センター所長
編集委員 (五十名順)	青藤 政史	日本産業衛生学会理事・産業医協会幹事 大同特殊鋼株式会社研究所長
	岡口 広博	日本産業衛生学会理事・産業医協会学術部部長 調子ジャーナル編集長
	広瀬 博雄	日本産業衛生学会理事・産業医協会副会長 管台健康診断所・産業医学センター所長
	藤代 一也	日本産業衛生学会産業医協会副会長・企業科長幹事 九州電力株式会社健康課
	三好 裕司	日本産業衛生学会産業医協会広報担当幹事 明治安田生命健康保険株式会社企画課所長
	山形 誠二	日本産業衛生学会産業医協会広報担当幹事 松下産業衛生医学センター所長
編集事務局	佐野 敦	パナソニックエレクトロニクスケアバイス部 本社健康管理課所長

発行にあたって

このたび、社団法人日本産業衛生学会産業医部会の編集による「産業医活動をする人のために」を刊行する運びとなった。産業医部会は平成4年1月の創設以来、「産業医・産業看護士全国協議会」（第1回開催は平成3年10月）を始め、「産業医プロフェッショナルコース」や各種研修会等の事業を手がけてきた。

これらの活動を通じ、産業医部会への貴重な助言、提言も数多く戴いた。それらのなかで産業医職務の実際の、具体的な方法がいまひとつわかりづらいという感想が少なからずあった。事業場の業種業態によって、産業医の職務の重要度、優先度にも異質がある筈で、この点が既存の教科書には明記されていないことも一回と思われる。例えば、鉄鋼業の工場現場と銀行業営業部とでは業種業態が著しく異なるため、自ずと産業医が果たすべき産業安全衛生上の課題点も異なってしかるべきであり、かつ、そうあらねば事業場のニーズにも合わない。

そこで事業場のニーズをどのようにとらえ、応えていくかという視点から本書の構成を試みた。多様化した業態についても横断的に解説を加えると共に、特に重視されるべき産業医の職務については特集を心掛けた。更には、嘱託産業医の方々にはやや馴染みの薄い産業衛生上の語句についても解説を加えた。

論語に「意なく、必なく、固なく、我なし」とある。主観に基づく強制、無理やりのごり押し、固執、そして、我を張ることをいさめた人生訓である。産業医という専門職に特に求められているのは、この人生訓に込められたバランス感覚であり、「人生、一養生なり」との高潔な態度であろう。事業場のすべての人達との充分なコミュニケーションに意を用い「健康な事業場」そして「社会に貢献し得る事業場」を担う一環に産業医がいてほしい。

このような産業医活動を実践しておられ、目下より私共が尊敬している方々に本書の主旨を申し上げ執筆依頼したところ、総勢103名の方から執筆の快諾を得た。本当に有り難いことと思っている。勿論、ご多忙だろうと私共が勝手に考えて、ご執筆をお願いしなかった方もおられるが、執筆戴いた方は紛れもなく当代が誇る名産業医の方々であることは間違いない。コラム欄として扱った「産業医の視点」などはまさに珠玉の一文といえる。

読者諸氏が、関連のあるところのみをお読み戴くのも無論結構だが、第1頁より「物語」のように読誦されることも勤めたい。きっと、目から鱗が落ちる感覚、熱いも甘いもかみわけるとはこういうことかとの思いを持たれること請け合いです。

尚、本書は社団法人産業医学振興財団発行の「産業医の職務Q&A」を姉妹本として併せて活用して戴くことを期待して編集した。例えば、有害作業や有害物質の一覧は読書を是非ともご参照戴きたい。

終わりになったが、本書へのご助言とご指導を戴いた高田紹先生（北里大学名誉教授）、和田政先生（東京大学名誉教授）を始め、校正、原稿の整理等雑用を担当してくれた丸紅（株）大阪健康開発センター 細岡智恵子、池田有加、更には産業医学振興財団事務局の諸氏に心から謝意を表したい。本書が産業医の方々のみならず産業保健にたずさわる、あるいは興味のある方々にとってよき参考書となるなら編者の望外の喜びである。

平成17年10月

編集委員長
岡田 章

事業場から産業医を依頼された際、その事業場が産業保健活動に何を求めているかをよく判断しなければならない。つまり、事業場で行われる産業保健活動には、その事業場を構成する組織体が醸成する組織文化（企業文化）を理解して適切な産業保健活動を構築することが大前提となる。

この点に関し、産業保健（Occupational Health）の目的について、ILO/WHO合同委員会は、1955年に1950年の目的にさらに3つの目的を追加した。その1つに、健康と安全を支援し、企業風土と作業組織、労働文化（Working Cultures）の発展を追加した。そしてこの労働文化は、企業の経営体制、人事方針、参加の原則、教育訓練方針と品質管理に反映することを内容とすることが提示されている。この点については、近年の産業災害、事故に関する企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility）が注目されている現状からも安全、健康、安心に象徴される企業文化への産業保健の重要性が理解される。

本書では、企業文化と産業保健の関係に着目して、26の業種、業界の産業保健上の問題点、産業医職務の重要事項等が産業医によって整理記述されている。これは、従来刊行されている産業保健の類書には無く、産業医が最も理解し、求めている点が的確に論述されていることが高く評価される。そして企業規模別、企業構成の形態別の特徴、さらに産業医活動の基本と産業の変革に伴って重視される産業保健の課題、さらには産業医活動の現場で経験される事例を産業医の視点として紹介され、産業医には関心を持って読まれることが期待される。

今後、日本産業衛生学会・産業医部会がわが国に求められている産業医活動を奨励して極めて時宜を得た好書を刊行されたことに賛評を述べると共に、現職の産業医ならびにこれから産業医活動に従事する諸氏への必読の書として推薦するものである。

推薦のことは

待望の今までにない産業医活動のためのブレイクスルー的な編纂書が、第一線の産業現場で活躍されている経験豊かな実地産業医の先生方を中心として出版された。

産業医学の教科書や参考書は、ともすれば産業医学専門家による堅苦しい法律に拘られた人間味のない非医師的な本となり、産業医を志す若き学徒の意欲を失わせ、かつ活動の進め方に混乱をもたらすものが多い。産業医の活躍する現場では温かく臨機応変的な人間的医学思考と働く人々との生きた接触が不可欠であり、これが実地産業医の真髄であるが、本書は正にこの真髄を具現し、伝承しようとするもので、そのエッセンスを簡潔に無駄なく、かつ経験豊かな実地産業医の原著をちりばめ編った実用的な虎の巻である。いわば教科書の行間を埋め、しかも、全ての産業医活動に必要な知識と手法、および実際の活動のノウハウが濃縮されており、新人産業医の方々や、マンネリに陥ったベテラン産業医の方々の脱気を覚まし、やる気を起こさせるものである。

さらに、産業医活動への導入を容易にするべく、まず第1章に現在の各産業界の産業医活動に必要な情報が示されており、その上、臨場感ある編意と活動に流動性とメリハリをつける“産業医の視点”がコーヒープレーク的な読物として数多く掲載されており、産業医活動の中を広げるのに役立つと思われる。また新人が消化不良を起こさないよう、最後に“産業衛生上の重要語句”がつけられている。編集企画の先生方の新たな挑戦への熱意と能力を十分感じることができる。

一読されれば、何顧もなく清涼感を味わい、知らず知らずのうちに産業医活動の真髄と全ての活動のノウハウが伝承され、活動の意欲が湧き、自信を持って活動できる道が開ける本である。是非とも一読、かつ熟読をお薦めする。

また、このような素晴らしい本を出された岡田章先生をはじめ、編集、執筆の先生方に心からの感謝と敬意を表したい。

目次

第1章 産業保健からみた業種の特徴

1 鉄鋼業	3
2 造船・重工業	8
3 化学工業	13
4 ガラス産業	19
5 製紙産業	24
6 自動車製造業	31
7 繊維工業	36
8 機械器具製造業	40
9 電気器具製造業	46
10 建設業	52
11 食品製造・加工業	56
12 印刷・製本業	63
13 製菓業	67
14 電気業	72
15 ガス業	78
16 旅客運送業	82
17 運輸貨物運送業	86
18 流通	89
19 小売業	92
20 銀行業	97
21 マスコミュニケーション業	103
22 ホテル業	107
23 官公庁等	110
24 大学・研究所	114
25 教職員	119
26 医療機関	124

第2章 小規模事業場・分散型事業場・外資系企業の産業医活動の特徴

1 小規模事業場の特徴	山口 次郎	135
2 分散型事業場の特徴	原代 一也	142
3 外資系企業の特徴	海渡 昌隆	146

第3章 基本的な産業医の職務

1 労務管理	山田 誠二	155
2 健康結果の生かし方	広瀬 智隆	162
3 職場巡回	小林 真実	169
4 有害物質管理	工藤 康嗣	175
5 産業医の安全への関わり方	高橋 悠彦	188
6 救急対応、防災	高木 勝	193

7 労働者保護	長井 聡	199
8 労働衛生教育、保健指導	三好 祐司	207
9 安全衛生委員会	松田 元	211
10 感染症対策	木村 正徳	216
11 睡眠時間評定法	森本 泰夫、津田 敏、日川 武、新島 邦行	223
12 健康情報の管理と倫理	堀江 正昭	231

第4章 最近特に重視すべき産業医の職務

1 メンタルヘルス対策—システムづくりと事例対応	一関 尚典	241
2 職場復帰・その後のフォローの方策	藤田圭一郎	247
3 選抜労働対策	沢口 長博	251
4 生活習慣病対策	櫻忍 洋一	257
5 労働者の健康情報保護の法規制に対応する労働衛生管理	宇田 茂樹	263
6 産業保健における人工工学的アプローチ	宇土 博	269

産業医の視点

1 ラウ病態者の復職支援と認知療法	井上 幸紀	279
2 メンタルヘルスにおける産業医活動	後藤 浩一	279
3 企業内部態所から見たメンタルヘルス	藤本 志司	280
4 リストラとストレス関連疾患	菅田 誠	281
5 短期に遭遇した社員への対応	藤本 正徳	281
6 中途採用者のメンタルヘルス	堀江 敏	282
7 ラウ状態を伴った難読病例	菅田 敏一	283
8 くも膜下出血の予防—脳動脈瘤の健康管理—	小泉 昭夫	283
9 職場における難読病ハイリスク群へのアプローチ	斎藤 俊介、川島 正敏	284
10 保健指導の基準—生活習慣病の一次予防のために—	日高 秀樹	285
11 産業保健活動における行動科学的アプローチ	堀越 哲也	285
12 土中の絞っちは売れないけれど	井上 正徳	286
13 体験による血圧コントロール導入の工夫	大栗 正明	287
14 健康管理は、科学的根拠に基づく説得力ある説明による 適切な指導で、各人に、対面で、誠心誠意、懇切丁寧に!!	大本美穂子	287
15 産業保健からみた航空運輸業の特徴	鎌谷 俊文	288
16 若年社員の健康管理	佐藤 広和	289
17 「健康指導」「保健指導」「健康指導」を区別して、指導していますか?	杉本 真治	289
18 ノロウイルスによる食中毒事例	高田 康光	290
19 HIV感染者・AIDS患者へのカウンセリング	高橋 良夫	291

目次

20	脂肪肝でも安心できない！	田邊 淳	291
21	アルコール依存症の一例から	向田 透	292
22	健康宣言、生命・生活・生産をまもろう	中屋 重道	293
23	保健指導事例	能川 浩二	293
24	他の医療機関で健診を受けた場合、その結果判定に産業医は どこまで責任を負うのでしょうか。とくに法定外検査について	橋 正仁	294
25	メタボリックシンドロームとウエスト周囲径	久保田昌詞	295
26	“半健康”人を見逃さないで	吉川 博通	295
27	産業医活動におけるアフォーメード予防	大前 和幸	296
28	作業関連運動障害者と職場ストレス	幸谷 尚男	297
29	復職判定の経験：仕事熱心な女性社員	相澤 好治	297
30	スーパー急患さんに発生した作業関連上肢障害	佐藤 修二	298
31	運動作業の健康管理	宮下 和久	299
32	金属アレルギー	藤司 純子	299
33	紙パルプ産業で働く人々を対象にしたIARC国際共同研究	津 玲子	300
34	低濃度（法規制外）フッ化水素曝露により 重篤な肺炎症状を来した事例と労働衛生管理	河野 公一、土手友太郎、日田 真、清水 宝孝	301
35	化学物質関連情報入手のための有用サイト	伊藤須英輝	301
36	発癌に相当因果関係の評価を	重藤 吟史	302
37	効力のある労働安全衛生マネジメントシステム運用のポイント	泉 淳一郎	303
38	職場口腔保健活動の新たな視点—他臓器疾患と口腔保健—	藤田 誠三	303
39	産業医活動の新しい流れ	井谷 徹	304
40	本質安全そして“本質健康”	岩田 全充	305
41	知っておくべきだった社会のこんな制度	岩坂 幹雄	305
42	嘱託産業医43年の体験から	氏家 睦夫	306
43	産業医活動のヒント	大久保清司	307
44	航空会社における健康管理	加地 正伸	307
45	包括的産業医学	木村 隆	308
46	産業医は燈台アンコウのオス？	斉藤 政彦	309
47	精液管理について	清水 英祐	309
48	少子化対策：子育てしやすい企業風土	西尾 久美	310
49	理想の会社	東 敏明	311
50	中小企業における産業医ネットワークの提案	橋本 正勝	311
51	健康情報の適当な提供時期	森岡 郁清	312

産業衛生上の重要語句

-----編 頁 313

第 1 章
産業保健から見た業種の特徴